

認知的構造欲求尺度作成の試み

筑波大学大学院(博)心理学研究科 鈴木 公基

筑波大学心理学系 桜井 茂男

Construction of Japanese version of Cognitive Need for Structure Scale

Kouki Suzuki and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Individual differences in the desire for simple structure may influence how people understand, experience, and interact with their environments. This study constructed Japanese version of the Cognitive Need for Structure Scale. Factor analysis revealed that this scale consists of two factors named "desire for structure" and "response to lack of structure". Cronbach's alpha coefficient proved reliability and correlational analysis with relevant scales confirmed the validity of this scale. Cultural differences and importance of further research are discussed.

Key words: Japanese version of Cognitive Need for Structure Scale, reliability, validity.

現代は情報化社会といわれており、我々が住む世界には本来個人では処理しきれないほどの情報が氾濫していると言える。しかし、人はそのような無数の情報の中から課題や状況に応じて適切な情報のみを取り出し、認知的負荷を相対的に低減させ、なおかつ効率的な情報処理活動を行っている。

このような認知的負荷を低減させるひとつの方法として「構造化方略」(structure strategy)がある。これは、世界を単純で扱いやすい形式に構造化することを意味している。例えば、時間割に従って行動したり、他者と出会ったときに、社会的規範のような一般的に認められたルールに従って相互作用したりすることが挙げられる。このような構造化された様式にしたがって認知活動を行えば、関係のない情報に注意を向けず、適切な情報にのみ注意を向けることができるようになる。結果的にこのことは認知的負荷の低減をもたらす。

心理学的にこの認知的構造化は「抽象的な認知的表象(例えば、スキーマ、原型(prototype)、スクリプト、態度、ステレオタイプ)の生成と使用」(Neuberg & Newsom, 1993)であるとされる。ま

た、ここで言う表象とは「過去の経験の単純化された一般化」(Abelson, 1981; Allport, 1954; Fiske & Taylor, 1991)である。すなわち、我々が日常使用している知識は認知的構造であると考えてよい。そのような知識は関連した経験を抽象化し一般化したものであり、新たな刺激や情報はその知識に従って処理されることになる。すなわち、汎用性の高い認知的構造を使用することによってより認知的負荷の少ないトップ・ダウンの情報処理を行うことができるのである。例えば、大学の先生と呼ばれる人に出会ったときに、自分のよく知っている大学の先生の表象に従って行動することは少なく、むしろ大学の先生についての「一般的な」表象に従って行動する。そしてそのような一般的な表象に従うほうがより少ない認知的負担でより効果的な相互作用もたらすことになるのである。

このように、認知的構造の生成と使用は最小限の認知的資源で自身の世界を理解するための手段と言ってよい。また、認知的構造が単純であればあるほど、汎用性が高くなり個人の認知的負担は低減することになる。さらに、それら認知的構造のひとつ

ひとつが明確に定義されている(他の構造と区別されている)方が、認知的負担を少なくする(Neuberg & Newsom, 1993)。なぜなら、新たな情報に直面したときにより素早く対応した認知的構造を用意することができるからである。このようなことから、認知的構造の効率性を論じる場合には、その単純性(汎用性)と定義性(弁別性)の高さが重要になってくる。

認知的構造は認知活動を効率的に行わせ、負荷を低減させるため、人はそれを多く使用するが、同時に注意、解釈、記憶、推論、印象形成などに様々なバイアスを生じさせることも事実である(Fiske & Taylor, 1991; Higgins & Bargh, 1987; Markus & Zajonc, 1985)。このことは、諸種の要因が人の柔軟な認知的処理を妨げ、認知的構造に従った処理を維持させようとした結果と見ることができる(Harvey & Schroder, 1963; Neuberg & Newsom, 1993)。すなわち、人には認知的構造に対する一般的な欲求(general need for structure)が存在すると仮定することができる。

近年ではKruglanskiら(Kruglanski, 1989; Kruglanski & Freund, 1983)が認知的構造欲求を概念化し、状況的操作(例えば、時間的圧力を与える)によってそれを高め、諸種の現象との関連を検討している(Freund, Kruglanski, & Schpitzajzen, 1985; Jamieson & Zanna, 1989; Kruglanski & Freund, 1983)。このように、一般的な認知的構造欲求ばかりでなく、状況的な要因によって引き起こされる認知的構造欲求もまた、複雑な世界を単純化させる機能を持つことが示されている。

本研究においては、認知的構造欲求にも個人差が存在するものと考え、それを測定する尺度の作成を目的とする。これまでの研究においても、認知的構造に対する選好を扱ったものは多い。例えば、Adorno, Frankel-Brunswik, Sanford, & Levinson(1950)によって研究された権威主義的パーソナリティやRokeach(1960)による独断主義などがそれにあてはまる。しかし、これらの概念は単純な認知的構造に対する欲求それ自体を表しているものとは言い難い。これらの概念にはイデオロギー的な側面や認知的構造欲求とは関連しない行動的な側面もまた重要な要因として扱われているため複合的な概念になっている。すなわち、認知的構造欲求それ自体を扱った個人差尺度はこれまでは開発されていないと言えるだろう。従って、より純粋に「認知的」な構造化に焦点を当てた尺度を作成することは意義があると考えられる。

また、単純な認知的構造の生成と使用は諸種の心理学的現象の根底にある要因であることも否定でき

ない。例えば、ステレオタイプ化、偏見、情緒的極端性、抑うつ等がそれにあてはまるだろう。認知的構造欲求の個人差尺度を開発することはこのような不適応現象を生じさせる人々を同定することにもなると思われる。

さらに、心理学における認知革命のひとつの結果として、人の環境に対する単純化の欲求が想定されている。近年の社会的認知の研究においても人は環境に対し柔軟な認知活動を行うと想定しているものの、一方で、人の認知的なデフォルト状態は単純化の動機を伴っているとも想定している(Fiske & Neuberg, 1990; Higgins & Sorrentino, 1990; Srull & Wyer, 1986)。すなわち、認知的構造欲求の個人差を検討することは、単純化の欲求が、個人の生活環境のどのような領域に影響を及ぼすのかを考えていく上でも重要な指標になるものと思われる。

本研究においては、認知的構造欲求尺度を作成するにあたり、Thompson, Naccarato, & Parker(1992), Neuberg & Newsom(1993)の考えに準拠した。Neuberg & Newsom(1993)は、認知的構造欲求の高い人について以下のように仮定した。すなわち、認知的構造欲求の高い人は、①単純で、固定化され、体制化された生活を認知的にも行動的にもする、②新しい出来事についても、単純な構造の使用を制限することは少ない、③日課を設定してそれを楽しみ、既知性の高い社会的状況を好む、と。言い換えれば、世界に対処する際に、単純に構造化された方法を探そうと動機づけられていると仮定している。また、Thompson et al.(1992)では認知的構造欲求が高い人は「ほとんどと言える状況において構造を好み明確さを求め、厄介でイライラするものをもたらず曖昧なものや中途半端なものには、不快を感じるだろう」と仮定している。これらのことから、彼らの作成した尺度はより「認知的な」構造化に焦点を当てたものと考えられる。

本研究の第1の目的は、Thompson et al.(1992), Neuberg & Newsom(1993)によって作成されたPersonal Need for Structure(PNS)の日本語版を作成し、その因子構造を検討することである。さらに、その尺度の信頼性と妥当性について検討することが第2の目的である。

方法

被調査者 大学生222名(男子62名, 女子160名)。
質問紙

(1)認知的構造欲求尺度: Neuberg & Newsom(1993)によって作成された個人的構造欲求(Per-

sonal Need for Structure) 尺度を日本語に訳したものを使用した。Thompson et al.(1992)によって作成された本来の尺度は12項目から構成されているが、うち、1項目は構造に対する欲求を反映していないという理由で、Neuberg & Newsom(1993)においては排除された。本研究においても Neuberg & Newsom(1993)に従って11項目を使用した。「非常にあてはまる」(6点)から「全くあてはまらない」(1点)までの6段階評定で、得点が高いほど認知的構造欲求が高いことを示す。

(2) 権威主義的パーソナリティ尺度：Adorno et al.(1950)に従って、藤沢・浜田(1961)が作成した日本語版から6項目を選択し使用した。それぞれの項目は6段階評定で、得点が高いほど権威主義的傾向が高いことを示す。

(3) 曖昧さに対する耐性尺度：今川(1981)によって作成された Ambiguity Tolerance Scale(ATS-IV)から項目-全体相関が高かった16項目を使用した。それぞれの項目は7段階評定で、得点が高いほど曖昧さに対する耐性が低いことを示す。

(4) 認知欲求尺度：Cacioppo & Petty(1982)に従って、神山・藤原(1991)が作成した日本語版15項目を使用した。それぞれの項目は7段階評定で、得点が高いほど認知欲求が高いことを示す。

手続き 上記の質問紙が被調査者に対して集団形式で実施された。

結果と考察

1. 認知的構造欲求尺度の因子構造と信頼性の検討

全11項目に対して主因子法による因子分析を行った。はじめは男女別に分析を行ったが、因子構造に

差がなかったため、両者をこみにして分析を進めた。固有値の減衰率が第3因子以降で緩やかになるため、2因子を抽出しバリマックス回転を施した。項目の選択は当該因子に.40以上の負荷があるという基準によって行い、その結果、1項目(項目4「どのようにすればよいか分からない状況に飛び込んでいくととまどってしまう」)が削除された。最終的に残った10項目について因子分析を行った結果をTable 1に示す。

第1因子は6項目が高い負荷を示し、「決まった場所に決まったものがあるのが好きだ」「明確で無駄のない生活は楽しいと思う」「スケジュールを決めて生活する方が人生は有意義だと思う」など自身の身の回りの生活が構造化されているのを好む傾向を測定していると思われる。これは Neuberg & Newsom(1993)によって見出された「構造に対する願望」(desire for structure)に対応するものであり、本研究においても同様の命名を行った。第2因子は4項目が高い負荷を示し、「何が起るかわからない状況にいるとウキウキする(逆転項目)」「思いもよらないことをしそうな人と一緒にいるのは好まない」「予定通りに事が運ばなくても気にしない方だ(逆転項目)」など構造化されていない場面に直面したり、予測したりすることが困難な状況に遭遇した場合の反応を測定していると思われる。これは Neuberg & Newsom(1993)によって見出された第2因子「構造欠如に対する反応」(response to lack of structure)に対応するものであり、本研究においても同様の命名を行った。また、この結果に基づいて下位尺度を作り、得点平均と標準偏差を算出した。結果はTable 2に示す。

項目4が排除された理由としては、日本語訳に際して、構造が欠如しているときにどのような反応を

Table 1 認知的構造欲求尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	共通性
6. 決まった場所に決まったものがあるのが好きだ.	.653	.168	.455
2. 明確で無駄のない生活は楽しいと思う.	.651	.141	.444
5. スケジュールを決めて生活する方が人生は有意義だと思う.	.635	-.055	.406
1. その場のルールがはっきりしないと嫌な気分になる.	.544	.252	.360
7. 規則正しい生活は退屈だ.	-.533	.011	.284
3. 不確かな状況は好きではない.	.492	.043	.244
11. 何が起るかわからない状況にいるとウキウキする.	.193	-.777	.640
8. 思いもよらないことをしそうな人と一緒にいるのは好まない.	.051	.762	.583
10. 予定通りにことが運ばなくても気にしない方だ.	-.242	-.651	.482
9. 直前になって予定が変わるのは嫌いだ.	.276	.581	.413
2乗和	2.250	2.061	4.311
寄与率(%)	22.5	20.6	43.1

するかということより、どれだけ早く決断することができるかという「決断性」と言える内容が強調されてしまったためと思われる。

次に、尺度の信頼性を検討するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、構造に対する願望下位尺度で $\alpha = .65$ 、構造欠如に対する反応下位尺度で $\alpha = .66$ 、尺度全体では $\alpha = .69$ であり、ある程度の内的一貫性が見られた。内的一貫性が意外に低い原因のひとつは項目数が少ないことによるものと考えられる。また、認知的構造欲求尺度が問題としている内容は抽象度が高いため、このような値でも致し方ないとも言える。これらのことから、本尺度の信頼性は一応確認されたと思われる。

また、2下位尺度間の相関係数は、 $r = .27$ であり、それほど高い相関は見られなかった。このことは、確認的因子分析によって尺度の2因子構造を確認したNeuberg & Newsom(1993)の結果と一致する。

2. 収束妥当性および弁別妥当性の検討

作成された認知的構造欲求尺度と関連する尺度との相関係数をTable 3に示す。

(1) 権威主義的パーソナリティとの関連

F尺度との相関係数を算出したところ、構造に対する願望下位尺度と合計尺度得点において弱いが有意な相関が見られた。この結果は、Neuberg & Newsom(1993)と一致している。そもそも権威主義的パーソナリティは「因習主義」「権威主義的従属」「権威主義的攻撃」などからなる複合的な概念と言ってよい。すなわち、単なる認知的特性ばかりでなく、その他のイデオロギー的・行動的特性を含んでいるため、全体としてはあまり高い相関が得られなかったと考えられる。また、このことは、認知的

構造欲求と権威主義的パーソナリティが異なった概念であることを示している。

(2) 曖昧さに対する耐性との関連

認知的構造欲求尺度とATS(IV)の間には中程度の相関が見られた。この結果は、Neuberg & Newsom(1993)によって得られた値より高いものである。この違いは、本研究において使用したATS(IV)の項目が16項目と、本来の33項目より大幅に減らしたことに起因すると考えられる。すなわち、ATS(IV)における上位の項目(項目-全体相関が高い項目)は、認知的構造欲求と類似した側面を測定しているものと考えられる(例えば、「理解しがたい振舞いをする人達と一緒にいることは、いささか不愉快です」「長い旅行に出る時は、行程をきちんと覚えておきます」など認知的構造欲求尺度と非常に類似した項目が含まれている)。本来、曖昧さに対する耐性という概念は複合的な概念であると考えられている(Neuberg & Newsom, 1993を参照)。したがって本研究で得られた結果は、曖昧さに対する耐性の概念が認知的構造欲求に関連する側面を含む、より包括的なものであることを示唆している。逆に言えば、認知的構造欲求は曖昧さに対する耐性に比べてより認知領域に限定した概念であると言えよう。したがって、認知的構造欲求は曖昧さに対する耐性とは密接に関連する部分があるものの、基本的には別個の概念と言うことができる。

(3) 認知欲求との関連

認知欲求は「努力を要する認知活動に従事しそれを楽しむ傾向」(Cacioppo & Petty, 1982)と定義される。認知的構造欲求が高い人は単純な情報処理を行うために認知欲求とは負の相関があるものと仮定される。しかし、本研究の結果では認知的構造欲求尺度と認知欲求との間には、尺度全体ではほぼ無相

Table 2 認知的構造欲求尺度の平均と標準偏差

	構造に対する願望	構造欠如に対する反応	合計
<i>M</i>	3.80	3.45	3.66
<i>SD</i>	0.65	0.54	0.48

注) 合計点を項目数で割った得点を示してある。

Table 3 認知的構造欲求尺度と関連する尺度の相関係数

	構造に対する願望	構造欠如に対する反応	合計
権威主義的パーソナリティ尺度	.273**	.193	.303**
Ambiguity Tolerance Scale	.401**	.506***	.508***
認知欲求尺度	.254*	-.167	.082

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

関であることが示され、構造に対する願望下位尺度においては有意な正の相関が見られた。認知的構造欲求の概念から考えると、単純な構造にしたがって認知活動を行う人はあまり努力を要する認知活動には従事しないと考えられ、実際に先行研究(Neuberg & Newsom, 1993)においては弱い負の相関($r = -.23$)が見られている。しかしながら、本研究においてはそれを支持する結果は得られなかった。むしろ、我が国においては認知的構造の生成と使用においてはある程度の努力を要する認知活動が行われることが示唆された。このことを文化的な視点から見てみると次のように考えることができるだろう。すなわち、欧米に比べて個人主義的ではない日本では、認知活動や行動の指標として、他者との密接なやりとりやその場の状況をよく考えた上で適切なルールを採用しなければならない。したがって、認知的構造(適切なルール)はある程度努力を要する認知活動が行われた上で使用されると考えられる。このような違いの原因をより明確にするには更なる研究が必要である。

以上の結果から、本研究で作成した認知的構造欲求尺度の収束妥当性ならびに弁別妥当性が概ね認められたと言ってよいだろう。

まとめと今後の課題

人は、複雑な世界をより扱いやすくするためのひとつの方略として、構造化を用いると考えられる。本研究では特に、認知的な構造に対する欲求に焦点を当て、その個人差を測定する尺度として Neuberg & Newsom(1993)によって作成された認知的構造欲求尺度の日本語版を作成した。因子分析の結果、先行研究で見られた因子と同様の因子が見られた。また信頼性・妥当性もほぼ確認された。

概ね結果は Neuberg & Newsom(1993)のものと同じであるが、いくつか更なる考察や検討を加えなければならない点も見出された。第1に挙げられるのは、認知的構造欲求と社会的情報処理との関係についてである。本研究において、認知的構造欲求尺度と認知欲求尺度との関連を調べたところ、第1因子の「構造に対する欲求」とは弱い正の相関があり、尺度全体としては相関がないことが示された。先行研究においては、状況操作ないし個人差尺度によって認知的構造欲求が高められると情報処理の程度が少なくなることが証明されている(例えば、Kruglanski & Freund, 1983; Freund et al., 1985)。本研究の結果はこれらと矛盾するものである。このような結果の違いは、ひとつには日米の文化的な差

異によるものと考えられる。また、欧米では状況操作と個人差尺度による操作が同じ効果を生み出したが、日本ではそれぞれの操作によって異なった効果が存在する可能性も考えられる。これらの点を考慮した研究が今後必要であると思われる。

また、上記の日米の文化差も考慮した上で、実際の社会的認知現象と認知的構造欲求との関連を検討していくことが必要であろう。例えば、先行研究では認知的構造欲求が単純な構造をつくり出すこと(Neuberg & Newsom, 1993, Study 3)やステレオタイプ化や偏見(Neuberg & Newsom, 1993, Study 4; Schaller, Boyd, Johannes, & O'Brien, 1995)と関連していることが見出されている。さらに、自動特性推論(spontaneous trait inference; Moskowitz, 1993)やプライミング効果(Thompson, Roman, Moskowitz, Chaiken, & Bargh, 1994)と認知的構造欲求との関連も見出されている。

さらに、社会的相互作用と認知的構造欲求に関する研究も望まれる。認知目標(認知動機づけ)に関する研究では、社会的認知現象ばかりでなく対人相互作用の領域にまでそれが影響することが示されている(例えば Sorrentino, Bobocel, Gitta, Olson, & Hewitt, 1988; Kruglanski, Webster, & Klem, 1993)。対人相互作用と認知的構造欲求との関連を明確にしていくことは、先に述べた文化差の問題を明らかにしていく上でも有効なものとなるだろう。

引用文献

- Abelson, R. P. 1981 The psychological status of the script concept. *American Psychologist*, **36**, 715-729.
- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J. & Sanford, R. N. 1950 *The authoritarian personality*. New York: Harper.
- Allport, G. W. 1954 *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Cacioppo, J. T. & Petty, R. E. 1982 The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 116-131.
- Fiske, S. T. & Neuberg, S. L. 1990 A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 23, pp. 1-74). San Diego, CA: Academic Press.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. 1991 *Social cognition*

- (2nd ed.). New York: McGraw-Hill.
- 藤沢 苜・浜田哲郎 1961 Fスケールによる人格の研究 I 教育社会心理学研究, **2**, 35-46.
- Freund, T., Kruglanski, A. W. & Schpitzajzen, A. 1985 The freezing and unfreezing of impressional primacy: Effects of the need for structure and fear of invalidity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **11**, 479-487.
- Harvey, O. J. & Schroder, H. M. 1963 Cognitive aspects of self and motivation. In O. J. Harvey (Ed.), *Motivation and social interaction: Cognitive determinants* (pp. 95-133). New York: Roland Press.
- Higgins, E. T. & Bargh, J. A. 1987 Social cognition and social perception. *Annual Review of Psychology*, **38**, 369-425.
- Higgins, E. T. & Sorrentino, R. M. 1990 *Handbook of motivation and cognition* (Vol. 2). New York: Guilford Press.
- 今川民雄 1981 Ambiguity Tolerance Scale の構成 (1) - 項目分析と信頼性について - 北海道教育大学紀要第一部C教育科学編, **32**, 79-93.
- Jamieson, D. W. & Zanna, M. P. 1989 Need for structure in attitude formation and expression. In A. R. Pratkanis, S. J. Breckler & A. G. Greenwald (Eds.), *Attitude structure and function* (pp. 383-406). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, **6**, 184-192.
- Kruglanski, A. W. 1989 *Lay epistemics and human knowledge: Cognitive and motivational bases*. New York: Plenum Press.
- Kruglanski, A. W. & Freund, T. 1983 The freezing and unfreezing of lay inferences: Effects on impressional primacy, ethnic stereotyping, and numerical anchoring. *Journal of Experimental Social Psychology*, **19**, 448-468.
- Kruglanski, A. W., Webster, D. M. & Klem, A. 1993 Motivated resistance and openness to persuasion in the presence or absence of prior information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 861-876.
- Markus, H. & Zajonc, R. B. 1985 The cognitive perspective in social psychology. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.), *Handbook of social psychology* (3rd ed., pp. 137-230). New York: Random House.
- Moskowitz, G. B. 1993 Individual differences in social categorization: The influence of personal need for structure on spontaneous trait inferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 132-142.
- Neuberg, S. L. & Newsom, J. T. 1993 Personal need for structure: Individual differences in the desire for simple structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 113-131.
- Rokeach, M. 1960 *The open and closed mind: Investigations into the nature of belief systems and personality systems*. New York: Basic Books.
- Schaller, M., Boyd, C., Yohannes, J. & O'Brien, M. 1995 The prejudiced personality revised: Personal need for structure and formation of erroneous group stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 544-555.
- Sorrentino, R. M., Bobocel, D. R., Gitta, M. Z., Olson, J. M. & Hewitt, E. C. 1988 Uncertainty orientation and persuasion: Individual differences in the effects of personal relevance on social judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 353-371.
- Srull, T. K. & Wyer, R. S., Jr. 1986 The role of chronic and temporary goals in social information processes. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior* (pp. 503-549). New York: Guilford Press.
- Thompson, M. M., Naccarato, M. E. & Parker, K. E. 1992 *Measuring cognitive needs: The development and validation of the Personal Need for Structure (PNS) and Personal Fear of Invalidity (PFI) measures*. Manuscript submitted for publication.
- Thompson, E. P., Roman, R. J., Moskowitz, G. B., Chaiken, S. & Bargh, J. A. 1994 Accuracy motivation attenuates covert priming: The systematic reprocessing of social information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 474-489.